

与謝野門下新詩社歌人・田村黄昏について

—— 略年譜の作成、田村黄昏ならびに与謝野寛未発表歌の紹介 ——

宮 本 和 歌 子

はじめに

与謝野寛の歌に、「豊彦と斉の肩のてらされて我がまへを行く石山の月」というものがある。大正十三年（一九二四）十月に石山から宇治を旅行した際に詠まれた一首で、「田村豊彦、万造寺斉両君も来会す」と付記がある。^①この二人について堀口大学は『万造寺斉選集』第9巻序文で、「万造寺斉はその頃の傾きかけた新詩社の社運を背負つて活躍した、若き短歌実作者の第一人者の観があつた。／他にも斉と同じく東京帝大の最上級またはそれに近いあたりに席を置いて、短歌に才を競つた二子があつた。田村黄昏、藤岡長和の二人だ。お互に爾汝相ゆるす仲らしく、この帝大三羽鳥の花やかな存在は、中学を卒えて田舎から出て来たばかりの、十八才の少年の目には羨しい限りのものに見えた」と記している。堀口大学が憧れのまなざしを向けた新詩社帝大三羽鳥のうち藤岡長和（明治二十一年（一八八八）〜昭

和四十一年（一九六六）は佐賀県や和歌山県、熊本県の知事を務め、万造寺斉（明治十九年（一八八六）〜昭和三十二年（一九五七））は出身地である鹿児島県いちき串木野市羽島に佐藤春夫選出の歌を三首刻んだ石碑が建立されているが、明治三十九年（一九〇六）五月『明星』誌上に「爾後本社同人に加盟せるは。中島清（東京） 田村豊彦（大阪）の二人なり」と名が現れて以降田村黄昏という号で『明星』や『スバル』に多くの歌を寄せた歌人は、先の二人に比して現在さほど知られていない。

佐藤春夫は昭和三十六年（一九六一）五月から一年間『朝日新聞』PR版に連載した「美の世界」において、「夕されば教室を掃ける小使の箒にかかるペンと桜」という歌を「さびしさに花咲ぬめり山桜」という蕪村の句と併せて紹介し、「作者田村氏は、わが二十の日の詩歌の仲間であったが、田村法学士はその後どうしたか消息も知らないが、さくらの時到的ごとに、この一首とあの温厚な人がらとが思出されてなつかしい」と田村黄昏を懐かしんでいる。

明治後期以降ほとんど歌を発表せず、佐藤春夫が「その後どうしたか消息も知らない」と回想した新詩社歌人・田村黄昏こと田村豊彦について、友人が彼の七回忌に作成した手製の歌集や与謝野寛からの書簡が収められていた封筒、与謝野夫妻筆の短冊といった品々を遺族から提供を受けて略年譜を作成し、活躍当時も公開のなかった豊彦の写真や未発表歌の一部、与謝野寛未発表歌を紹介する。

一 経歴について

冒頭で紹介した歌に関連して、「与謝野寛年譜」大正十三年（一九二四）の項に「十月、晶子を伴ひ、山下新太郎・正宗得三郎両画伯・高木藤太郎・関戸信次・奥田鴻巢諸君と近江の石山に九月十五夜の月を観て、柳屋に宿る」とある。与謝野晶子も『明星』第五卷第六号誌上に、同年十月十二日からの石山旅行で滋賀県石山の柳屋に大阪から豊彦

や石井柏亭、森繁夫、万造寺齊が訪れ、豊彦は翌朝十月十三日帰阪したと記している⁽⁸⁾。豊彦とともに歌に詠まれた万造寺は当時京都府葛野郡花園村伊町一九に居住し、大谷大学予科で教鞭を執っていた⁽⁹⁾。「明治三十八年、私は川内中学を卒業して、鹿児島第七高等学校にはひり、四十一年東京の文科大学に進んだ。／その頃渋谷に住んで居られた与謝野寛氏のお宅を訪問して、親しく氏のお教へを受ける事となつたのは、それから間もなくの事だつた」と万造寺は万造寺齊歌集『蒼波集』（昭和七年（一九三二）七月 街道社）所収「成長のあと」に記し、「堀口大学、佐藤春夫、中原綾子、田村黄昏、藤岡長和の諸氏とも新詩社を介して交を結んだ」とも述べている⁽¹⁰⁾。堀口大学や万造寺齊の記述から、万造寺と同じ明治末期頃に東京帝国大学に籍を置き新詩社で作歌に勤しんだと推測される田村黄昏は、どのような経歴の人物であつたのか。

大植四郎編『国民過去帳 明治之巻』（昭和十年（一九三六））に掲載されている「田村典瑞」という人物の項に「大阪高等工業学校教授兼鉱山監督署技師正六位勲五等 田村豊彦の父にして明治四十一年十一月五日大阪府東成郡天王寺村の自宅に没す⁽¹¹⁾」とあり、田村豊彦は明治期の日本を代表する化学者田村典瑞⁽¹²⁾の息子であることがわかる。遺族提供の戸籍謄本には明治十九年二月二十日出生田村典瑞二男、母つ祢とあるが、遺族によれば豊彦の他に成人したのは三人の妹と一人の弟だという。大正十一年（一九二二）四月『帝国大学出身録』には、「田村豊彦 大阪府西成郡玉出町五六二ノ五ノ君は明治十九年大阪府西成郡玉出町に生る大正元年東京帝国大学法学部経済学科を卒業し大正五年大阪織物株式会社に入社し今日に至る⁽¹³⁾」とある。

『第三高等学校一覽 明治三十五年九月起明治三十六年八月止』には、大学予科第一部第一年級八十七名のうち法科甲四十名の一人として東京府土族田村豊彦の名前がある⁽¹⁴⁾。第三高等学校編『第三高等学校一覽 明治三十七年九月起明治三十八年八月止』（明治三十八年（一九〇五）一月 第三高等学校）の「略沿革」に明治三十六年（一九〇三）「九

月十一日例ニ依リ始業式及入学宣誓式ヲ行フ」とあり、九月十一日入学であったことがわかる。大蔵省印刷局編『官報』第六九〇五号（明治三十九年（一九〇六）七月六日）に第三高等学校大学预科第一部法科卒業生として記載されているが、冒頭に掲げたように『明星』誌上に新入社員として名が挙がるのが明治三十九年五月午年第五号であることから、新詩社入社は第三高等学校大学预科在籍中の明治三十九年三月中旬から四月中旬頃と考えられる¹⁵。彼の七回忌に友人である小牧茂彦が選出、作成した私家版田村黄昏歌集『黄昏』の「序に代へて」に京都の第三高等学校寄宿舎北寮第三室での逸話が記されているように、この頃の豊彦は京都市上京区（当時）の第三高等学校寄宿舎で暮らしていた。

『東京帝国大学一覽 従明治四十年至明治四十一年』には、法科大学政治学科第一回受験生として「田村豊彦 東京士」とある。当時の東京帝国大学は九月に第一学期開始であったが、第三高等学校大学预科卒業の翌年、明治四十年（一九〇七）九月満二十一歳で東京帝国大学法科大学政治学科に入学したことになる。『東京帝国大学一覽 従明治四十一年至明治四十二年』の明治四十一年（一九〇八）九月末現在学生生徒氏名にも、法科大学経済学科第一回受験生として東京府士族田村豊彦の名が掲載されている。彼の孫は、学生を伴い調査に行った際の事故が原因で父親の典瑞が亡くなり、父親の死に伴い豊彦は就職に有利な分野へ専門を変更したと聞かされているという²¹。確かに明治四十年九月東京帝国大学法科大学政治学科入学の一年後に同大学経済学科へ再入学しているが、典瑞の死因については、「或時学校から四国の或る地方に出張せられた時大酔の余旅館の二階から落ちられ、其れが因をなして終に旅の空で客死せられたが、未だ其れ程の老境でもなく、所謂酒が禍をなして早逝せられた」という教え子の記述があり、長い闘病の末の死ではなく急な出来事であったことがわかる。戸籍謄本には明治四十一年十一月五日典瑞の死により家督相続とあるが遺族宅の過去帳には典瑞の死は十一月三日と記載され、後章で紹介するが豊彦も十一月三日に父が旅先で

亡くなったことを歌に詠んでいる。前掲『東京帝国大学一覽 從明治四十一年至明治四十二年』には法科大学經濟学科の学生生徒氏名は豊彦ら第一回受験生百四十名分しか記載されておらず、『東京帝国大学一覽 從明治四十二年至明治四十三年』の「沿革略」には明治四十一年の出来事として「七月二日法科大学ニ於ケル政治学科ヲ分チテ政治学科經濟学科ノ二学科トス」⁽²³⁾とある。豊彦の東京帝国大学法科大学經濟学科入学は明治四十一年九月、典瑞の死は明治四十一年十一月であることから典瑞の死は豊彦の進路変更の原因ではなく、同年七月の法科大学經濟学科設置に伴い第一期生として改めて新設の同学科に入学し直したとみられる。

『東京帝国大学一覽 從大正二年至大正三年』（大正三年（一九一四）一月 東京帝国大学）によつて、豊彦は大正元年（一九一三）十月東京帝国大学法科大学經濟学科を卒業し法学士の学位を授与されていることを確認できる。⁽²⁴⁾大正元年十月の東京帝国大学法科大学經濟学科卒業から前掲『帝国大学出身録』に大正五年（一九一六）とある大阪織物株式会社入社までの動静について詳細は不明であるが、大正二年（一九一三）五月『スバル』第五年第五号の「消息」欄で「田村黄昏氏は四月一日から三個月間世田ヶ谷の騎兵科へ入營する事になつた」⁽²⁵⁾と、陸軍騎兵学校の前身である陸軍騎兵実施学校に入營することが伝えられ、『スバル』第五年第六号「消息」には「四月から三ヶ月間兵隊さんになつて居る田村黄昏から、馬糞を掴んだり、何処の馬の骨か知れない奴の靴を磨かされたりしてるのがいやだとこぼしてきた」⁽²⁶⁾とある。その後予定の入營期間を終えたのか、同年十月『スバル』第五年第十号や翌十一月の『スバル』第五年第十一号で新詩社関連の会合に豊彦が参加したことが報告されている。彼の子孫宅には大正三年（一九一四）六月二十三日付駒込局消印の押された与謝野寛からの封筒が残っているが、差出人は「中六番町十ノ与謝野寛」（写真

1)、宛先は「区内富士前町二十一／田村豊彦様」と読み取れ(写真2)、この頃の豊彦は東京市本郷区駒込富士前町に居住していたことがわかる。

『大正十年度用 日本工業要鑑第十一版』には三人いる大阪織物株式会社副支配人の一人として、『大正十二年度用 日本工業要鑑第十三版』では会計主任として名が挙がっている。『大正十二年用 第二十七版日本紳士録』には、

「田村豊彦 会社員、東成郡天王寺二一四四」とある。⁽³⁰⁾ 前掲大正十一年四月

『帝国大学出身録』には玉出町の住所が記載されているのに対し大正十一年十一月『大正十二年用 第二十七版日本紳士録』では東成郡天王寺の住所が記載され、『大正十四年用 第二十八版紳士録』に記載されているのは「西成、玉出」と再び玉出町の住所である。大正十五年(一九二六)発行の『出身学校別 現代紳士録』には「田村豊彦 東京帝国大学法科(経済) 明治四五年卒 大阪織物株式会社員(原) 大阪府(現) 大阪市西成区玉出町五六六」とある。昭和二年(一九二七)発行の紳士録では「西成、辰見通一丁目」となっており、『昭和五年度 紡織要覧』には「田村豊彦 東帝大、大阪織物株式会社会計主任 大阪市西成区玉出町五六三ノ五」とある他、以降昭和六年(一九三一)、昭和七年(一九三二)発行の紳士録に西成辰巳通一ノ六の住所が記載されている。戸籍謄本には昭和七年四月十三日に兵庫県武庫郡今津町今津字浦風十九番地へ転居とあるが、転居前の住所として記載されているのも大阪市西成区辰巳通一丁目六番地である。

私生活面では、岩野喜久代編『与謝野晶子書簡集』(昭和二十三年(一九五八)二月 大東出版社)所収大正八年(一九一九)七月十九日付与謝野晶子から小林雄子宛の書簡に「明日は田村氏上京され女子大学の卒業生小沢りよ子と初めての会見さるゝはずに候」とあり、既に大阪織物株式会社に入社し大阪に住んでいたと思われる豊彦が上京して

写真2 (遺族撮影)

見合いをすることが記されている。この時は縁談不成立だったらしく、同年十二月三十日付与謝野晶子から小林雄子宛の書簡で「田村（豊彦）氏また明三十一日に見合ひいたされ候へば、その結果の解る時、三月より早く大阪へまゐることにもきまり候はんとて、（中略）田村氏の結婚の相手の人、この度は美しき人にて候へば、或はまともり候ことと存じ候。写真にて異存なしと申されしあとにて候。或は六甲山あたりにてなさばよからんなど例の空想をいたし居り候⁽³⁵⁾」と、今度は関西方面で別の相手と見合いをする予定が記されている。遺族宅にはこの時の見合いで結婚が決まったことを窺わせる内容の大正九年（一九二〇）三月二十六日付寛、晶子連名の書簡が残っており、逸見久美編『与謝野寛／晶子書簡集成』第二巻（平成十三年（二〇〇一）年七月 八木書店）所収の大正九年（一九二〇）二月三日小林一三宛晶子書簡にも「このごろある人の結婚のなかだちをいたし居り候へば」とある。「見合ひいたされ候へば、その結果の解る時、三月より早く大阪へまゐること」や前掲「与謝野寛年譜」に大正九年「五月、晶子と共に大阪に赴く」とある同年前半の与謝野夫妻の複数回の大阪行きは、仲介していた豊彦の結婚に関連したものとみられる。同年七月十三日と戸籍謄本に記載のある最初の結婚相手浜田さいが与謝野夫妻の仲立ちで見合いを行い結婚に至った女性と思われるが、さいは姑のきつさに耐えかね出て行ったというのが孫の伝え聞いている話である⁽³⁶⁾。

戸籍謄本から最初の妻・さいとは大正十年（一九二一）四月二十三日に協議離婚が成立しており、昭和三年五月八日に下間姚子（しもつまたよこ）と結婚したことを確認できる。昭和四年（一九二九）九月六日には二番目の妻・姚子との間に長女寿子が誕生し佐藤春夫から祝いの色紙を贈られた他、豊彦夫妻はまだ赤子の娘を連れて東京の与謝野邸を訪問し、出された紅茶のカップに娘が手をぶつけて溢した逸話を聞かされているという⁽³⁷⁾。前述の私家版歌集『黄昏』に収録されている小牧茂彦「序に代へて」には「会社を止めて後は実にいゝお父さんでもあつた」とあり、豊彦は子供が生まれた後に大阪織物株式会社を退職していたようだが、昭和七年十二月十日に誕生した長男照彦が赤子の

時、昭和八年（一九三三）十一月九日午前六時二十分豊彦は風邪をこじらせ腎臓を悪くしたのが原因で当時居住の西宮市今津字浦風十九で亡くなり、雑司ヶ谷の墓地に葬られた。⁽³⁸⁾ 当時にしては大柄であったため（写真3）、棺を特注したという。昭和九年（一九三四）一月『冬柏』第五卷第二号では、「昨年十一月に新詩社の旧友田村黄昏（名は豊彦）氏が没せられた。氏は高等学校時代より同学の藤岡長和氏と共に「明星」や「スバル」へ歌を出された人である」と豊彦の死を知らせている。

冒頭で紹介した佐藤春夫「美の世界」で述べられている豊彦の温厚な人柄は孫にあたる人物が伝え聞いている豊彦像とも一致しているが、佐藤春夫が「美の世界」を発表した時、豊彦の死から二十五年以上経過していたのである。次章で詳述する与謝野寛還暦祝賀基金に豊彦も佐藤春夫も参加していることが昭和八年二月『冬柏』第四卷第三号で確認できることから、豊彦の死を報じた前掲『冬柏』第五卷第二号も佐藤春夫の手元に届いていた可能性が高いが、旧友の訃報を伝える小さな文字を見落としていたのだろうか。

改造社編『新万葉集』第五卷（昭和十三年（一九三八）五月 改造社）には、「田村黄昏 本名豊彦。明治十九年二月東京に生る。大正元年九月東京帝大法科大学経済学科卒業。大正五年大阪織物株式会社入社、昭和六年退社。昭和八年十月兵庫県武庫郡甲子園に逝去。三高時代より作歌に入り、大正元年前後は「明星」に抛り、其後「スバル」に

写真3 後列左から三番目が豊彦、前列右端が姚子と娘。
昭和5年(1930)の典瑞二十三回忌法要と推定。(遺族提供)

も発表す」とある。大阪府生まれとする前掲『帝国大学出身録』と相違がある他、昭和八年十一月九日逝去のところ同年十月、大正元年十月東京帝国大学卒業のところが九月卒業となっている。また、現時点で詳細な時期が確認できていない大阪織物株式会社退職を昭和六年としている。『新万葉集』の作者略歴はある程度の信憑性を有するが典拠が不明であるため、豊彦の大阪織物株式会社退職年に関する一説の紹介に留めておく。

二 歌人としての活動

『黄昏』所収小牧茂彦「序に代へて」によると、明治三十六年（一九〇三）九月第三高等学校寄宿舎北寮第三室で出会った垢抜けた顔の学生が田村豊彦で、いつの間にか豊彦や小牧ら八人が集まり雅星会という和歌の会が発足したという。豊彦の作歌ノートが明治三十六年秋に始まることから彼が歌を作ったのはこの時が初めてではないかとし、同会の中でも豊彦は第一人者であったと述べている。豊彦は東京の大学に入ってからでも作歌熱が増し『明星』にも載るようになったと小牧は哀惜を込めて追憶し、豊彦の遺した歌は千数百首に上ると述べているが、彼はいかなる経緯で与謝野門下に加わったのか。二番目の妻の姚子は下間氏という西本願寺と関わりのある家の出身で、現在の京都市中京区河原町蛸薬師から木屋町蛸薬師の旧土佐藩邸跡付近、立誠小学校から蛸薬師通りを隔てた北側に実家があったという。⁽⁴²⁾ 与謝野寛の実家は現在の京都市左京区岡崎にあった西本願寺支院願成寺であったことから、⁽⁴³⁾ 豊彦の実家田村家も西本願寺と何らかの関わりを持っていた縁で姚子との再婚や与謝野門下への入門が実現した可能性が考えられる。あるいは、『スバル』第二年第八号に与謝野寛が寄せた文に寛の父親は明治十三年（一八八〇）四月から明治十七年（一八八四）夏まで鹿児島本願寺出張所顧問として鹿児島県にいたとあり、豊彦の父である典瑞も少なくとも明治十六年（一八八三）には鹿児島県にいたことが確認できるように、⁽⁴⁴⁾ 父親同士が知り合いだった関係で豊彦の新詩社入社が

実現したものでろうか。

田村黄昏名義で活字となった彼の歌としては、佐々木信綱、与謝野晶子選新派和歌の資料の一つとして掲載された「薄月夜山はしづかに大聖が涅槃のさまに横はりけり」という作が恐らく最も早く、明治四十年（一九〇七）三月五日発行『応用新案 漢詩と新体詩』に収録されている。⁽⁴⁵⁾この歌は『黄昏』にも収録されている。「薄月夜山は静かに大聖の涅槃のさまに横はりけり」に手を加えて晶子が選出したものとみられるが、半年後の明治四十年九月東京新詩社『明星』未歳第九号に「新詩社詠草」として「年なかば夜のつづくてふ国の夜の明けぬることし君と別れぬ」「思はれてあるとも知らでありし日の心安さに今日ひとり寝る」他計十二首が、明治四十一年（一九〇八）三月東京新詩社『明星』申歳第三号の「新詩社詠草」に「大いなる半裂けたる手套をつと投げて喚ぶおほけなけれど」「王者なきこは荒国か塵あがり大風ふきて日ぞ曇りたる」の他、「過ぎし日の為めにと云ひて酒杯をあはせぬあはれ若き後世びと」「な嘆きそ汝が売る強き火の酒をよろこばざるはただわれ等のみ」等計二十九首、明治四十一年十一月東京新詩社『明星』満百号記念終刊号「新詩社詠草」には「夜もすがら泣きいさちたる大声の男を見むと日はのぼりきぬ」等計三十八首収録されている。このほか明治四十二年（一九〇九）十月『スバル』第十号に父の死を詠んだ歌を含む十八首、明治四十三年（一九一〇）四月『スバル』第二年第四号に「ぬれ燕」として二十四首、明治四十三年六月『スバル』第二年第六号に「檻と柵」として三十六首、明治四十三年八月『スバル』第二年第八号には「雨」として二十一首、明治四十三年十一月『スバル』第二年第十一号には「澗」として五十四首、明治四十四年（一九一一）二月『スバル』第三年第二号に九首、明治四十四年八月『スバル』第三年第八号に二十八首掲載されている。明治四十三年には二、三ヶ月おきに『スバル』に掲載されておりこの年『スバル』に掲載された歌は百三十五首、同年に限っては吉井勇や高村光太郎、森林太郎と並ぶ『スバル』の常連であった。また、明治四十三年十二月『スバル』第二年第十二号「消息」

欄には「十一月五日に新詩社連の塩原行きがあった。(中略)その夜は福渡戸の丸屋の二階で短歌会をした。(中略)あくる日は塩の湯の明賀屋で昼食をして、その夜帰った」と十一月五日六日の土日を用いた一泊旅行の報告がなされ、与謝野夫妻や長男の光、万造寺齋や藤岡長和、堀口大学、佐藤春夫らとともに豊彦も参加者として名を連ねていることからも、⁽⁴⁶⁾この年の豊彦は新詩社で活発な活動を行っていたことがわかる。

東京帝国大学卒業の年である明治四十五年(一九一二)以降豊彦の歌はほとんど発表されなくなるが、大正二年(一九一三)九月三日には江南文三の千葉中学赴任送別会に参加し、⁽⁴⁷⁾同年十月五日の新詩社談話会、同年同月十二日の新詩社短歌会にも参加している。⁽⁴⁸⁾大正三年(一九一四)八月我等発行所『我等』第一年八月号に本名の田村豊彦名義で二首を寄せ同年八月三日にはカフエー・ライオンで開かれた我等談話会に参加し、⁽⁴⁹⁾大正十一年(一九二二)一月明星発行所『明星』第一巻第三号に「別後」と題し寂しさを歌った歌など十八首掲載され、明治四十年九月『明星』未歳第九号から大正十一年一月明星『明星』第一巻第三号まで計十二回二八九首が文芸雑誌に発表されたことになる。

大学卒業後しばらく東京で過ごした後大阪織物株式会社での勤務に伴い大阪で暮らしていた豊彦であるが、大正七年(一九一八)年十一月十三日には九州旅行の途中で大阪府の浜寺公園を訪れた与謝野夫妻と会っていることを、渡辺湖畔宛与謝野寛・晶子の葉書で確かめられる。⁽⁵⁰⁾また、大正十三年(一九二四)十月十二日からの与謝野夫妻の石山・宇治旅行中に豊彦が石山を訪れ翌十三日大阪に戻ったという記録は第一章で紹介したとおりだが、同年十月十三日は月曜日であったため会社員の豊彦は早くに大阪へ戻ったのだろう。与謝野晶子「晩春遊記」(昭和四年(一九二九)四月)には昭和四年四月十四日から十日間の旅行中、「郷里の堺へまでも行って姉や弟に逢ひ、大阪へ引返して、野田屋で催された童心倶楽部の晩餐会で、石川戯庵、斎藤溪舟、広江酒骨、田村黄昏其他の旧知に逢ふ」⁽⁵¹⁾とあり、豊彦は子供誕生を心待ちにする間にも与謝野夫妻に会っていたことがわかる。

彼は与謝野夫妻から短歌を書き付けた短冊と引き換えに金の用立てを依頼されたこともあると姚子が語っていたとい⁵²、「山の湯にみどりの羽をぬぎ放ち／紅雀なりしがしら鳥となる 寛」「洛陽をすこしくもれる夕月の／あかりにのぞく天つかりがね 晶子」と書き付けられた短冊が現在も子孫の家に残っている(写真4)。晶子の歌については、初句のみ異なる「東京を少しくもれる夕月のあかりに覗くあまつかりがね」という類歌が与謝野晶子『流星の道』(大正十三年五月 新潮社)に収録されている⁵³。

が、艶めかしい光景を思わせる寛の歌に関しては逸見久美編集代表『鉄幹晶子全集32 全歌集五句索引篇』(平成二十三年〈二〇一〇〉九月 勉強出版)に同一歌、類歌は見当たらず、未発表歌と思われる。

昭和八年(一九三三)二月『冬柏』第四卷第三号掲載「与謝野寛先生還暦祝賀基金御送附御芳名」では一口の欄に田村豊彦の名前があり⁵⁴、二人の子供が生まれた後も与謝野夫妻への義理を欠かしていなかったことがわかる。豊彦とともに東京の与謝野家を訪ね夫妻と面会したことがある姚子は与謝野家や晶子に対して良い印象を持っていなかったらしく、与謝野家に関しては「ごちやごちやした非常に落ち着きのない家だった、与謝野晶子に関してはものすごい抜き襟のだらしない着方をした人だったと感想を語っていた他、晶子が金策のため頻繁にやってきたことも話していた⁵⁵」という。旧家の深窓で育った姚子の目には、大勢が入りをする和謝野家や堅気の女性とは思えないほど襟を抜いた着こなしをする晶子が異世界の住人として否定的に映ったであろうことは、想像に難くない。夫の死後も豊彦や義父

写真4 (遺族撮影)

典瑞の遺品を大切に保管していた姚子であるが、与謝野夫妻筆の短冊などは知人らに譲渡していたという遺族の話も与謝野夫妻への心証の悪さを物語っている。⁽⁶⁶⁾ 様々な名目で大勢から集金する一方で絶えずあちこちを旅行する与謝野夫妻が先進的な著名文化人として世間に認識されていることを知ってはいても、彼らの自筆短冊に金額相応の価値があると姚子は思えず、借金の代わりに渡されたと受け止めたのではないか。

昭和三十二年（一九五七）十一月京都大学文学部国語学国文学研究室編『国語国文』第二十六卷第十一号掲載「大阪における『明星』派歌人の消長」で明石利代は田村黄昏を大阪在住明星派歌人の筆頭格に数えているが、彼が『明星』や『スバル』で活躍した時期は東京居住期間が主で大阪居住期間に歌が文芸誌に掲載されたのは大正十一年一月の明星発行所『明星』第一巻第三号のみ、近畿居住期間に幅を広げてもこれに京都居住期間の明治四十年九月東京新詩社『明星』未歳第九号が加わるのみであったことが今回の調査で判明した。万造寺齊は新詩社同人となつてからの生活について前掲『蒼波集』所収の「成長のあと」で、「突然、故郷を遠く離れた東京の寂しい下宿生活の孤独の中に、恐ろしい都会生活の渦巻と誘惑との中に投げ出され」、「酒と女との遊蕩生活の泥濘の中へ、初めはすくなくならずびくびくしながら、然し後には思ひ切り大胆に向う見ずに飛び込んで行つた」と回想し、「私のはひつて行つた世界の腐敗した空気が私の血液の清浄と霊の純潔とを毒しつつかつた。さうして私には、恰も阿片の中毒者が、その生存を維持する為には阿片の喫飲を必要とするごとく、遊蕩が必要欠くべからざるものとなつた」と文芸活動を名目として紅灯の巷に繰り出し遊蕩に溺れていく様子を阿片中毒に例え、「黒い幽鬱と空虚と疲労と絶望とだけが残つた」と、享楽に耽る一方でそれを是としない感情もあつたことを記している。⁽⁶⁷⁾ 万造寺と同時期に新詩社で活動をしていた豊彦もこれと大同小異の生活に足を踏み入れていたと推察されるが、東京居住期の田村黄昏としての目立つた活動は、与謝野夫妻や新詩社仲間との交流の親密さと連動していたと考えられる。

『黄昏』には明治四十三年八月の大水害を詠んだ「濁流に都は半ばひたりつつ上野浅草朝の鐘鳴る」、進路の悩みを詠んだと思われる「今はよしわがゆく方も定まりぬ夜明けぬほどはかく思ひ居ぬ」など悩める若者の心情や目にした光景を歌い『明星』や『スバル』に掲載された既発表歌もあれば、明治四十一年「わが父の死の病と聞きてゆく夜汽車の中に眠る弱きよ」「瀬戸の海神代のままに島どもの浮ぶを見れど慰まぬかな」「霜月の三日の夕ぐれ瀬戸の海しぐるるの中に眼とち玉ひぬ」、明治四十二年「十日ほど経て天王寺停車場に柩となりて父は帰りぬ」、明治四十四年以降「弟のもの云ふとき亡き父の声をふと聞くときのかなしさ」といった父の死にまつわる歌や父を懐かしむ歌の他、昭和四年「歌おもふゆとりだになく病院の廊下にて待てる永き一日」「廊下にて今こそ吾子の生れつと聞きつる時の胸のどよめき」「吾子がいま健き産声上げつらむ時とも知らず廊下にて待つ」、昭和五年（一九三〇）「子の遊ぶむしろの上にも居て煙草を吸ひて静心なし」「正月のやすみは樂し子の遊ぶむしろの上にも遊べば」といった子供の誕生を、心待ちにする歌や子を見守り慈しむ歌などの未発表歌も含めた計四百四十一首が収録されている。歌の数としては明治四十三年詠歌分が多いが、昭和五年詠歌分まで収録されている。

姚子は孫に、豊彦は典瑞の死に伴って歌の道を諦めたと言っていたことであるが、大学卒業後十年経ってから『スバル』に歌を寄せ与謝野夫妻らと面会をし、寛の還暦祝賀基金に参加し、細々と歌を作り続けていた。『黄昏』収録の「飽きもせで子のうはさなどくり返す友達ばかり多くなりゆく」という歌を詠んでいた豊彦が父親となつてからは、前掲私家版歌集『黄昏』の「序に代へて」で「偶々私の処へ来ても始から終まで子供のことばかり話して帰つてゆくこともあつた」と小牧茂彦が回想するほどの子煩悩に変貌しており、『黄昏』所収昭和五年詠歌分に「楽しさは児と遊ぶときただ一人酒を汲むときその外になし」という歌もあるように、昭和五年分のほとんどが子供の歌である。高齢で授かった娘を豊彦は大変可愛がり、娘も父親である豊彦に大変懐いて父が帰宅するとすぐに膝に座り、晩酌の

つまみのチーズと一緒に食べていたといひ、⁽⁵⁹⁾ 幸せな家庭生活であったことが窺える。与謝野夫妻との交流を保ちつつも目立った活動をしなくなったのは、父親が亡くなり歌よりも現実的な職で生計を立てる必要が生じたためかもしれないし会社員としての勤務に集中する必要があったためかもしれない、あるいは母や妻といった家族の目を気にしてのことであつたかもしれないが、豊彦は作歌を完全に止めたわけではなく、晩年には家庭の幸せも詠んでいたのである。

与謝野晶子は前掲『流星の道』所収「自分の歌に就て」で、「私にも歌の友人は少しばかりあります。相会して歌を作つたりもします。併し之は派を作らうとか歌で勢力を張らうとか云ふ仲間ではありません。何れも私と同じ素人歌人がめいめい勝手な歌を作らうと云ふ点に気が合つて友人づきあひをしてゐるだけの事です。(中略) 私達は寂しく独りで歌つて居ようとする仲間です」と述べている。若き日の豊彦の歌には寂しげな心情や懊悩を詠んだものが目立つが、父となつてからの歌には穏やかで幸福な日常の一場面を詠んだものが複数ある。晶子だけでなく彼にとつても、心に抱えた孤独や空虚がある時は和らげまたある時は表現するための手段が歌であり、孤独を紛らわし満たされたい心を表現しようとする者の集まりが歌仲間の会合であつたのだろう。実家を遠く離れた東京で暮らす時期に豊彦が新詩社同人として作歌活動を盛んに行つたのは、大きな孤独や不安を抱えていたせいではなかったか。我が子の誕生や我が子が遊ぶ姿を詠つた豊彦の歌には苦悩も空虚もなく、穏やかな生活を送る静かな喜びに満ちているからである。

最後に、現時点で判明している田村黄昏こと田村豊彦の経歴を略年譜としてまとめしておく。

【田村豊彦略年譜】

- 明治十九年（一八八六）二月二十日　〇歳　父・田村典瑞、母・つ祢の次男として誕生
- 明治三十六年（一九〇三）九月十一日　十七歳　第三高等学校大学予科第一部法科入学
- 同年秋　第三高等学校寄宿舎で雅星会発足
- 明治三十九年（一九〇六）三〜四月頃　二十歳　新詩社入社
- 同年七月六日　第三高等学校大学予科第一部法科卒業
- 明治四十年（一九〇七）三月　二十一歳　『応用新案　漢詩と新体詩』田村黄昏名義の歌一首掲載
- 同年九月一日　『明星』十二首掲載
- 同年同月十一日　東京帝国大学法科大学政治学科入学
- 明治四十一年（一九〇八）三月一日　二十二歳　『明星』二十九首掲載
- 同年九月十一日　東京帝国大学法科大学経済学科入学
- 同年十一月五日　『明星』三十八首掲載
- 同年同月三日　田村典瑞死去
- 明治四十二年（一九〇九）十月一日　二十三歳　『スバル』十八首掲載
- 明治四十三年（一九一〇）四月一日　二十四歳　『スバル』二十四首掲載
- 同年六月一日　『スバル』三十六首掲載
- 同年八月一日　『スバル』二十一首掲載
- 同年十一月一日　『スバル』五十四首掲載

同年同月五日

与謝野夫妻らと塩原に一泊旅行

明治四十四年（一九一三）二月一日 二十五歳

『スバル』九首掲載

同年八月一日

『スバル』二十八首掲載

大正元年（一九一三）十月

二十六歳

東京帝国大学法科大学経済学科卒業

大正二年（一九一三）四月～七月

二十七歳

陸軍騎兵実施学校入営

同年九月三日

昂発行所での江南文三送別会に参加

同年十月五日

新詩社での談話会に参加

同年同月十二日

新詩社での短歌会に参加

大正三年（一九一四）六月

二十八歳

東京市本郷区駒込富士前町六十一に居住

同年八月一日

『我等』二一首掲載

同年八月三日

カフェー・ライオンでの我等談話会に参加

大正五年（一九一六）

二十九～三十歳頃

大阪織物株式会社入社

大正七年（一九一八）十一月十三日

三十二歳

大阪府堺市で与謝野夫妻と面会

大正八年（一九一九）七月二十日

三十三歳

小沢りよ子と見合い

同年十二月三十一日

浜田さいと見合い

大正九年（一九二〇）

三十三～三十四歳頃

大阪織物株式会社副支配人を務める

同年七月十三日

三十四歳

浜田さいと結婚

大正十年（一九二二）四月二十三日 三十五歳

浜田さいと協議離婚

大正十一年（一九二二） 三十五〜三十六歳頃 大阪織物株式会社会計主任を務める

同年一月一日 三十五歳 『明星』十八首掲載

大正十三年（一九二四）十月十二日 三十八歳 滋賀県石山の料理旅館・柳屋で与謝野夫妻と面会

昭和三年（一九二八）五月八日 四十二歳 下間姚子と再婚

昭和四年（一九二九）四月 四十三歳 大阪の浜寺公園で与謝野夫妻と面会

同年九月六日 長女・寿子誕生

昭和七年（一九三二）四月十三日 四十六歳 大阪市西成区辰巳通一丁目六番地から兵庫県武庫郡今津町今津

字浦風十九番地へ転居

同年十二月十日 長男・照彦誕生

昭和八年（一九三三）十一月九日 四十七歳 午前六時二十分西宮市今津の自宅で死去、享年四十八

おわりに

堀口大学が帝大三羽鳥と評した三人のうちの一人、田村黄昏こと田村豊彦の経歴と新詩社での活動について調査を行い、豊彦の孫から生前の豊彦の写った未公開の貴重な写真や多くの未発表歌を含む私家版歌集『黄昏』、与謝野寛からの封筒、寛未発表歌の書きつけられた与謝野夫妻筆短冊といった未公開品の提供を受け、聞き取りも踏まえて略路譜を作成した。豊彦の妻は彼の死後何年も経ってから生まれた孫に、豊彦は父親の死に伴い就職に有利な分野に進路変更をし歌の道を諦めたと話していたそうだが、帝国大学法科大学内での学科変更、再入学は経済学科新設が理由のようで、作歌も一生続けていた。

帝国大学卒業後も創作活動を続け著作出版をしたり知事を歴任したりとある程度表立った活動をしていた三羽鳥の他二人と比べ、大学を卒業した後の豊彦の足跡はあまり詳らかではない。出生地や第三高等学校入学までの経歴、大阪織物株式会社退社年など生前の豊彦の詳細を知る人物がすでにいないため遺族でも把握できていない事項があるが、『明星』や『スバル』で華々しい活動をしていたのは近畿在任期ではなく東京帝国大学在籍中の東京居任期であったことが今回明らかとなった。死後に編まれた歌集には第三高等学校時代の歌から晩年の歌までが収められ、若き日の歌には苦悩や孤独を詠んだものが目立つのに対して子供に恵まれてからの豊彦は家庭生活での幸福を詠んでおり、穏やかな晩年であったことが見て取れる。

第三高等学校大学予科在籍中に新詩社同人となり東京帝国大学在学中に何度も『明星』や『スバル』に歌を発表した豊彦であるが、陽の目を見なかった歌はいくつも残っている。引き続き遺族の協力を得て子孫宅に保管されている『黄昏』収録の既発表歌、未発表歌を分類した上での公表を目指す他、『黄昏』にも選出されなかった習作の調査が必要である。未発表歌のうち、普遍的な幼子の行動と親の心理を巧みに捉えて詠み上げた晩年の作品の数々は新詩社時代の友人万造寺齊の詠んだ我が子の歌と並び子を思う父親の歌として秀逸であり、『黄昏』未収録分も含め特に注意して調査を行う予定である。

また、今回紹介に至らなかつた若き日の万造寺齊や堀口大学と写った旅行写真の撮影地や一緒に写っているメンバーの特定が課題として残っている他、同じく紹介に至らなかつた与謝野夫妻からの書簡や佐藤春夫直筆色紙、豊彦に加え与謝野寛、森林太郎、佐藤春夫、高村光太郎らによる第一回我等談話会寄書についても調査と翻刻を行い、改めて発表することとしたい。

注

- (1) 『与謝野寛短歌全集』(昭和八年(一九三三)二月 明治書院)上巻より引用。
- (2) 菅原杜子雄編『万造寺齋選集』第9巻(昭和三十九年(一九六四)九月 謙光社)収録、堀口大学による序文「万造寺齋を思う」より引用。東京帝国大学編『東京帝国大学一覽 従明治四十一年至明治四十二年』(明治四十一年(一九〇八)十二月 東京帝国大学)掲載の「学生生徒姓名(明治四十一年九月未現在)」に、文科大学文学科明治四十一年入学生として「万造寺齋 鹿兒島平」とある。平は平民の意。同じ年の文学科入学生に谷崎潤一郎の名もある。東京帝国大学編『東京帝国大学一覽 従大正元年至大正二年』(大正二年(一九一三)一月 東京帝国大学)により、万造寺は明治四十五年(一九一二)七月に文学科英文学専修学科を卒業していることが確かめられる。
- (3) 『明星』午年第五号(明治三十九年(一九〇六)五月 東京新詩社)より引用。『与謝野寛短歌全集』(昭和八年二月 明治書院)下巻所収「与謝野寛年譜」では、明治三十六年(一九〇三)の項に「藤岡長和・田村黄昏・渡邊湖畔・白仁秋津の諸君、新詩社同人となる」と記され、藤岡長和は昭和十八年(一九四三)三月六日「与謝野晶子先生追憶の会」で「私は第三高等学校在学中、明治三十九年、新詩社に入れて戴きまして(中略)先生のお宅へは、始終田村君と連れ立って、お伺ひ致しまして御指導を受けた」と語ったことが菅沼宗四郎編『白桜遺芳』(昭和十八年九月 紫弦社)に記録されている。『明星』誌上で報告された年と「与謝野寛年譜」の年には三年の開きがあるが明治三十九年までの『明星』には田村黄昏の作品も名前も登場しないため、本稿では明治三十九年を採用した。
- (4) 明治四十三年(一九一〇)六月昂発行所『スバル』第二年第六号掲載「檻と柵」の中の一詩である。
- (5) 朝日新聞PR版掲載「美の世界」当該回切り抜き記事参照、引用。掲載年月日不詳。
- (6) 大正十三年(一九二四)十月十二日は日曜日で月齢十三・三の旧暦九月十四日、月齢十四・三の満月となる旧暦九月十五日は翌日十月十三日月曜日であった。
- (7) 注(3)掲『与謝野寛短歌全集』下巻所収「与謝野寛年譜」より引用。

- (8) 『明星』第五卷第六号(大正十三年十一月 明星発行所)掲載与謝野晶子「一隅の草」に、「近江石山の月を観たいと云ふ良人の發議で、十月十二日の朝の汽車で東京を立ちました」とあり、「大津で下車して、夜に入つて石山の宿の柳家へ着きました。(中略)柳家へは既に岡山から正宗敦夫さん、大阪から田村黄昏、森繁夫の二氏の外に、丁度滞阪中の石井柏亭さん、京都から万造寺齊さんと云ふ顔触が先着して待受けて居て下さるのでした。(中略)翌朝は東京から伊上凡骨さんが夜汽車で着かれましたが、石井、森、田村、三氏は大阪へ早く帰られ(下略)」とある。
- (9) 『京都府学事関係職員録 大正十三年五月十五日現在』(大正十三年六月 京都府教育会) 参照。『京都府学事関係職員録 大正十四年五月十五日現在』(大正十四年(一九二五)七月 京都府教育会) にも同じ住所で掲載されている。
- (10) 本文掲『蒼波集』所収「成長のあと」より引用。
- (11) 大植四郎編『国民過去帳 明治之巻』(昭和十年(一九三六)十二月 尚古房)より引用。同書の凡例に、「本書の材料は主に墓碑、新聞、官報より獲て居る此三者は本文の骨子で負ふ所甚だ多い」とある。
- (12) 大阪高等工業学校で教鞭を執っていた田村典瑞に教えを受けた田沢震五は自著『創作 海』(昭和四年(一九二九)四月 新高堂書店)において、田村典瑞はキュリー夫人がラジウムを発見したのとほぼ同じ明治三十一年(一八九八)頃ウラニウム鉱石の放射能研究を既に行っていたほどの「化学分析に就いては当時に於ける日本有数の大家であった」と評している。
- (13) 原田登編『帝国大学出身録』(大正十一年(一九二二)四月 帝国大学出身録編集所)より引用。
- (14) 第三高等学校編『第三高等学校一覽 明治三十五年九月起明治三十六年八月止』(明治三十六年(一九〇三)十一月 第三高等学校) 掲載。「本校大学予科生徒五百八十九名」参照。明治三十六年九月三十日時点での在籍者が記載されている。本文掲『黄昏』所収歌を選出し序文を書いた小牧茂彦も、豊彦と同じ法科甲四十名の一人として名前がある。
- (15) 本文掲『官報』第六九〇五号「第三高等学校ニ於テ同日大学予科卒業証書授与式ヲ举行セリ其卒業生ノ族籍、氏名左ノ如シ」とある中の「第一部 法科」に、「東京府土族 田村豊彦」と記載がある。
- (16) 東京新詩社『明星』午年第四号(明治三十九年四月)で別の新入会員が二人紹介されている他、「次号原稿締切期限は四月十九

日とす」とあることを根拠とする。

- (17) 豊彦の二番目の妻・姚子の昭和十四年（一九三九）十一月九日付卷末言によれば、『黄昏 亡夫豊彦偲び草』は豊彦七回忌に際して遺された詠草を畏友小牧茂彦に選んでもらったものだというのである。巻頭の小牧茂彦「序に代へて」は、「明治三十六年九月、其時分の第三高等学校の寄宿舎の北寮第三室に顔を合せた中に垢抜けのした学生が一人居た。夫れが田村君であつた」と始まっている。

- (18) 東京帝国大学編『東京帝国大学一覽 従明治四十年至明治四十一年』（明治四十年（一九〇七）十二月 東京帝国大学）掲載の「学生生徒姓名（明治四十年九月末現在）」より引用。士は士族の意。

- (19) 前掲注（18）同書第一章「学年暦（明治四十、四十一年）」参照。第一学期は九月十一日、第二学期は一月八日、第三学期は四月八日に始まり七月十一日夏期休業開始である。

- (20) 注（2）掲『東京帝国大学一覽 従明治四十一年至明治四十二年』参照。

- (21) 令和五年（二〇二三）三月二十七日田村豊彦の孫にあたる人物より聴取。祖母である豊彦の二番目の妻から豊彦の話をししばしば聞いていたという。

- (22) 注（12）掲田沢震五『創作 海』より引用。『官報』第七六一三号（明治四十一年十一月十日）に「正六位勲五等田村典瑞ハ本月五日孰モ死亡セリ」とあり、『官報』第七六一〇号（明治四十一年十一月六日）の「叙任及辞令」には明治四十一年十一月五日付で「叙正六位 従六位勲五等田村典瑞」とあることから、典瑞は死に際して一位昇進させられたことがわかる。

- (23) 東京帝国大学編『東京帝国大学一覽 従明治四十二年至明治四十三年』（明治四十三年（一九一〇）一月 東京帝国大学）より引用。

- (24) 東京帝国大学編『東京帝国大学一覽 従大正二年至大正三年』（大正三年（一九一四）一月 東京帝国大学）参照。同年十月に同じ経済学科を卒業した者は他に三名、最初の経済学科卒業生は明治四十五年七月に輩出されている。

- (25) 『スバル』第五号第五号（大正二年五月 昴発行所）より引用。

- (26) 『スバル』第五年第六号（大正二年六月 昇発行所）より引用。
- (27) 与謝野寛の署名が入った封筒には富士前町二十一とあるが、豊彦の長女の戸籍謄本に結婚前の本籍地として富士前町六十一の番地が記載されていることから、寛の記した番地は誤りであろう。
- (28) 工業之日本社編『大正十年度用 日本工業要鑑第十一版』（大正九年（一九二〇）十一月 工業之日本社）参照。
- (29) 工業之日本社編『大正十二年度用 日本工業要鑑第十三版』（大正十一年十二月 工業之日本社）参照。
- (30) 交詢社編『大正十二年用 第二十七版日本紳士録』（大正十一年十二月 交詢社）より引用。
- (31) 交詢社編『大正十四年用 第二十八版日本紳士録』（大正十三年十二月 交詢社）より引用。
- (32) 日本秘密探偵社編『出身学校別 現代紳士録』（大正十五年（一九二六）十二月 日本秘密探偵社）より引用。（原）は原籍地の略である。
- (33) 交詢社編『昭和二年刊行 第三十一版日本紳士録』（昭和二年（一九二七）九月 交詢社）より引用。
- (34) 紡織雜誌社編『昭和五年度 紡織要覧』（昭和五年（一九三〇）一月 紡織雜誌社）より引用。
- (35) 本文掲岩野喜久代編『与謝野晶子書簡集』より引用。
- (36) 令和五年三月三十日豊彦の孫より聴取。約九カ月の婚姻期間であった前妻との間に子はいなかったとみられる。姚子の遺したメモに、「どうしてお母さんはおまえに優しくしてくれないのかな？お祖母様は厳しかったと口癖のように言っていたから、それを思うともう少し優しくしてくれたらいいのに。照彦（息子）の嫁には優しくしてやってくれ」と豊彦に言われたと書いてあったという。豊彦の母・つ祿は豊彦の死の翌年昭和九年（一九三四）、豊彦を迎えに来て枕元に座っていると言い残し死去したという。
- (37) 注(36) 同日同人物より聴取。当時としては遅めの初婚であった姚子は、実家にいた頃は室内でも自分の足で歩かないほどの乳母日傘で育てられたという。
- (38) 注(36) 同日同人物より聴取。死亡時刻、場所は遺族提供の戸籍謄本による。

- (39) 『冬栢』第五卷第二号(昭和九年(二九三四)一月 冬栢発行所)より引用。
- (40) 注(36) 同日同人物より聴取。長身のおっとりした温厚な人物であったという。
- (41) 秋里籬島選、春朝齋竹原信繁画『拾遺都名所図会』巻一(天明七年(一七八七) 河内屋太助他刊)に「下間家 本願寺房官にして東西六条に其家多し」とある他、秋里籬島選、春朝齋竹原信繁画『都名所図会 平安城再刻』巻二(安永九年(一七八〇) 新版・天明六年(一七八六) 再版 吉野家為八刊)の本願寺鼓楼の項に「豊心丹の主方は坊官下間氏にありこれより葉を出す」とあり下間家は本願寺坊官の家系であったことが確かめられるが、孫にあたる人物によると姚子の実家は西本願寺と関係がある下間家だという。
- (42) 注(36) 同日同人物より聴取。
- (43) 注(3) 掲『与謝野寛短歌全集』下巻所収「与謝野寛年譜」、明治六年(一八七三)二月二十六日のこととして「京都市外岡崎村(今の京都市左京区岡崎町)の西本願寺支院、願成寺に生る」、西本願寺の僧演暢入りて住し、演暢の没後、その友なる僧礼蔵これを継承し、寺格を西本願寺の支院たらしめ、(中略)寛はその礼蔵の四男なり」とある。
- (44) 『スバル』第二年第八号(明治四十三年八月 昂発行所) 掲載与謝野寛「礼蔵法師歌集の初にしるしおく文」に、「明治十三年、再び法衣を著けて西本願寺の役僧となり、同四月、鹿児島本願寺出張所の顧問として派遣せられ、(中略)十七年夏、医の薬物の分量を誤りしに由りて大病を得、(中略)職を辞して京都に帰れり」と父・礼蔵について記されている。豊彦の父・典瑞については大蔵省印刷局編『官報』第百五十号(明治十六年(一八八三)十二月二十六日)に「鹿児島県ニ於テハ七月ヨリ九月迄ニ該地病院薬局長田村典瑞ヲシテ(下略)」とあり、明治十七年(一八八四)鹿児島県庁編『鹿児島県職員録 明治十七年四月一日調』(明治十七年五月 富山仲吉刊)に鹿児島医学学校三等教諭栃木県士族田村典瑞として記載され、『官報』第一一九二号(明治二十年(一八八七)六月二十一日 大蔵省印刷局編)にも鹿児島県の地方衛生会委員として名が見られる。
- (45) 小宮水心『応用新案 漢詩と新体詩』(明治四十年三月 積善館 参照、引用)。
- (46) 『スバル』第二年第十二号(明治四十三年十二月 昂発行所) 江南文三による「消息」欄本文掲出箇所に続けて、「同勢は、彦

太、文三、齊、黄昏、長和、豊太郎、HANA O SATO、羅漢仏、大学、伊上凡骨諸氏、与謝野寛氏、晶子、光さん、平出修氏夫婦令嬢」とある。

(47) 『スバル』第五年第十号（大正二年（一九一三）十月 昂発行所）九月二十三日付、平出修筆「消息」欄に「江南君が千葉中学へ赴任した。近い処故送別会と云ふのも変な位であつたが、去三日発行所で小会を開いた。森先生、与謝野御夫婦、灰野、久保田、万造寺、田村、川上及余等が集つた」とある。

(48) 『スバル』第五年第十一号（大正二年十一月 昂発行所）十月二十四日付、万造寺齊筆「消息」欄に「十月五日新詩社で談話会があつた。与謝野寛、与謝野晶、中島清、柏木松雄、田村豊彦、藤岡長和及万造寺齊等が集まつた」、「十二日新詩社で久しぶりの短歌会があつた。与謝野寛、与謝野晶、吉井勇、柏木松雄、田村豊彦、藤岡長和、佐藤春夫、広川叔泉、岡山たづ及万造寺齊等が集まつた」とある。

(49) 『我等』第一年九月号（大正三年九月（一九一四）我等発行所）の八月二十八日付万造寺齊「編輯者より」に、「八月四日に第一回の我等談話会を開いた。（中略）かうしてライオンの三階に集つたのが森博士、与謝野寛氏、田村豊彦氏、万造寺齊氏、佐藤春夫氏、秦豊吉氏、江南文三氏、松本苦味氏、高村光太郎氏の九人。十一時過まで話込んで散会した」とある。遺族蔵の第一回我等談話会寄書、森林太郎『隅外全集著作篇』第二十一卷（大正十三年一月 岩波書店）から、八月四日開催が誤りで八月三日月曜日に開催されていたことがわかる。

(50) 本文掲逸見久美編『与謝野寛／晶子書簡集成』第二巻によれば、大正七年（一九一八）十一月十三日の消印が押された泉州浜寺公園の絵葉書に「九州へ向ふ途中、一寸ここに一泊して田村黄昏兄と語りをり候」と寛が、同じ葉書に豊彦は「貴兄の名を聞くと新詩社の歌会を思ひ出し候 此の頃又歌会盛んの由お出かけになり候や」と記している。同年同月十三日は水曜日だが、堺市の大阪織物株式会社と浜寺公園はさほど離れていないため、勤務時間の後に面会に向かったのだろう。

(51) 『与謝野晶子全集』第十一卷（昭和九年八月 改造社）所収「街頭に送る」中の「晩春遊記」より引用。注（3）掲「与謝野寛年譜」にも、昭和四年（一九一九）四月の項に「晩春遊記」の内容と一致する記録がある。

(52) 注(21) 同日同人物より聴取。

(53) 本文掲『流星の道』参照。

(54) 昭和八年二月冬柏発行所『冬柏』第四卷第三号参照。同基金は『冬柏』第三卷第十二号(昭和七年十一月 冬柏発行所)の表紙

と目次の間の広告で計画が発表され、『与謝野寛短歌全集』刊行と寛の書齋補修を目的とし一口十円一人一口以上を募っている。

(55) 令和五年四月二十五日豊彦の孫より聴取。伯母である豊彦の息子の妻も同じ話を聞いているという。

(56) 注(36) 同日同人物より聴取。

(57) 注(10) に同じ。

(58) 注(21) 同日同人物より聴取。

(59) 令和五年四月十七日豊彦の孫より聴取。

(60) 本文掲『流星の道』所収「自分の歌に就て」より引用。

〔付記〕

引用文は通行の字体を用い、斜線で改行を表し、適宜ルビを省いた。豊彦の遺品の数々や『黄昏』、談話を提供し協力してくださった豊彦の遺族にはこの場を借りて改めて深く感謝申し上げます。

(みやもとわかこ・本学非常勤講師)